

小田原史談

第84号

発行所 小田原史談会
小田原市西栢山3310

誠忠之碑

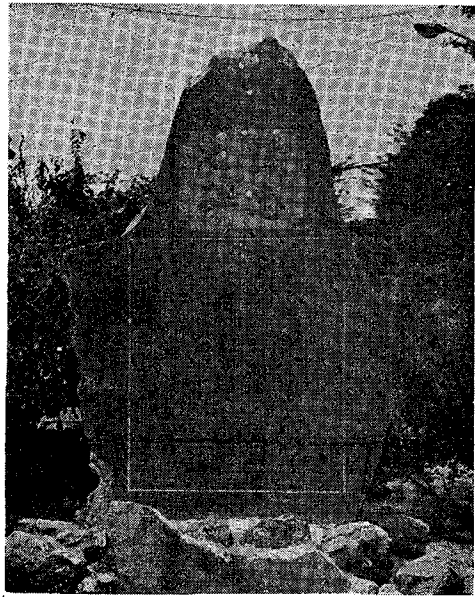
内田 武雄

嗚呼君之忠勇、若臨、威海衛戰、擄將之功必有超乎衆者不及、此役而歿可憐馬然、自為斥候、冒險深入尽力職務死有余榮亦可以隕於地下也。按君、姓、志邨、名、次三郎、嘉兵衛三男、相模国足柄下郡下府中邨人、資正、端正、沈黙果斷往年応徵兵令為、陸軍歩兵一等卒、明治廿七年征清之役與焉、君屬乎歩兵第一聯隊第八中隊。海路千里達於盛京省。當、此時清兵堅扼要處守之。我軍養銳七日進擊、劉家屯略、大連灣遂陷旅順城、君每戰有功二十八年二月十一日、我軍張榮西夏家屯以庄清兵。君受命視察地形夜十點鐘。單身出營深入敵地適、清兵百余騎來襲、君放連發銃斃十餘騎、自背後突進翻身疾呼揮刀斬敵騎、敵兵退五十步攢戰困之身亦蒙敵槍端坐而死

年二十有六王師西征清國之強暴、輔韓廷之獨立、名正義大、威海衛之戰、清艦沈沒、城寨破隕、清廷馳使、謝罪、我武揚揚遠輝海外、君決然從軍得列名乎國史可謂盛矣。頃者、下府中邨諸子相謀將録石以伝千萬朽請

文千余因記其功蹟係以七古一篇。

王師所向真無敵
將軍指揮見籌画
單身出營察地形
那山戴雪天地白
何物白騎列劍鋒
身墮狼狼噉噬中
連發之銃斃敵騎
伏屍狼藉流血紅
銃執九端氣蓋奮
刀刃所触生快風
裂衣囊瘡拔刀立



下堀八幡社境内ある
誠忠之碑

山鬼潛形万籟空
武人臨軍期一死
深入虎穴獲虎兇
必有忠節傳千秋
國史上猶添精彩
明治三十四年十二月十五日
正三位勲一等男爵
大島圭介題額

從三位勲三等
西岡逾明撰并書
石工 瀬戸小太郎刻

此の碑は小田原市下堀の八幡社の境内に建ててあります。下堀村志村次三郎氏の日清戦争の時の戦功をたたえて、郷土の方々のおほねおりによって建てられた事が裏面の文によってあきらかです。次に表面の文書に付いて、宇野応之先生にわかりやすくしていただいた

たものを記しました。

嗚呼君の忠勇はすなわちイカイエいの戦いのぞむや旗をぶんどり、將をとりにするのこう必ず超あり衆はあばず、此役に歿すららむべきや然り、みずから斥候となり、冒險し深く入り力つきて職務に死す、余榮あり又もつて地下に隕すべきなり。あんずるに君姓は志村名は次三郎、嘉兵衛二男なり。

相模国足柄下郡下府中村人、しせいたんせい沈もく果だん往年徴兵令に応ずるや、陸軍歩兵一等卒となる明治廿七年征清の役おこるや、君歩兵第一聯隊第八中隊に属し、海路千里盛京省に達す、まさに此時清兵堅く要処によりて之を守る、我軍銃をやしない七日進撃リウカトンをやくし、大連灣旅順城を遂かんす、君戦うごとに功あり、二十八年二月十一日我軍張榮西夏家屯をもつて清兵をあつす。君命を受け地形を視察す、夜十點鐘。單身營をいでて深く敵地に入る、たまたま清兵百余騎來襲す。君連發銃をはなち十余騎をたす背後より突進身をひるがえし疾呼す力を揮つて敵騎を斃、敵兵五十歩しりぞく攢戦これをかこむ身もまた数槍をこうむる、たん坐して死す年二十有六王師西征

す清國の強暴、韓廷をたすけて之を独立す。正義名大威海衛の戦に清艦沈没、城寨はたいし、清てい使をはせて罪を謝す、我が武揚揚遠海外に輝く。

君決然軍にしたがい名を國史に列するを得、盛と謂ふべし、頃ごろ下府中村の諸子相はかりまきに石にろくし以て不朽に伝へんと文を余に請、よりて其の功蹟を記し係以て七右の一篇とす。

詩文

王師向ふ所真に敵無。將軍指揮ちゆう画を見る。單身營をいでて地形を察つす。那山は雪をいただき天地白し。何物か白騎列を列す。身はをつ郡狼だんせいの中(カミ食スルト)

連發の銃斃敵騎をたす。かばねは伏す狼藉流血紅。銃をとり九端(フンセン)氣益々ふる。刀刃ふれる所快風を生ず。裂衣りそう刀を立てて杖とす。山鬼形をひそめ方らに空なり。

武人軍にのぞみ一死をきす。深く虎穴に入らずんば虎兇を得ず。まさに中節有り千秋に伝ふべし。國史上猶添精彩を添ふ。

發起者名

志村幸太郎

志村平太郎

禅林奇談

西山 銈太郎

一、大器和尚のへえずり石

小田原市の北部、下曾我

駅から程近い仲河原の緑の丘に曹洞宗瑞雲寺がある。その入口には昔から有名な三本松があった。樹令三百数十年と云はれた古木で天高く聳えてたが、惜しい事に数年前松くい虫にやられてしまった。境内に入ると左右は一片の梅林である。先住大井龍跳先生が、多くの青年を薫陶された自修学校は、此の左側が発祥地である。やがて右側に万霊塔があり、その台石は昔から一千五百メと云はれた大石である。これには、如何にも禅寺に相応しい話が伝えられている。

現住から四世の昔、文政天保の頃第十八世大器和尚の呼ぶ事である。此の万霊塔の台石を移動させる必要があつて、壇家から毎日何十人となく勤勞奉仕に來た当時の事だから、皆屈強の農民だったが、何しろ千五百メと云はれるだけに、その作業は容易な事ではない。ロープでくくって、太い丸太を何本も通して担ぐのだ

が、肩に喰ひ入って一日にいくらか進めない難作業だつた。

今日は、どうしても目的地迄運んでしまはなければと考へた和尚は、人々が何時もの如く「ヨーインョ」の掛声諸共に担ぎ上げると同時に、此の大石の下にもぐり込んでしまった。さあ大変。壇家の人々は、肩の骨、腰の骨が折れても下ろす訳にはいかない。アレヨアレヨと云ひつつも、小足ながら一足二足と和尚の上から石を離そうと前に出た和尚は石の下を前へくと這えずる。石は、アレヨアレヨの声と共に進む。遂に目的地迄運んで……いや運べてしまった。

以来此の石は誰云うとな「大器和尚のへえずり石」と呼ばれて、どんな苦勞を重ねても、大望を達したいと願う人々の信仰の的となつた。「大器和尚のへえずり石」如何にも禅僧にまつわる逸話として面白

肥後熊本の産、寿五十五であつた。墓は境内の墓地にあり、歴代住職とは全く異つた桁がいの大きい自然石で、表面に「当山十八世塔」裏面に遷化の年月日が刻んである。

二、めんたま弁天

瑞雲寺で只今庫裡並びに檀徒会館、それに付随した建物の建設工事が進められている。それと同時に、昔から庫裡の裏にあつた池とその周辺の整備を行つて居る。以前は立派な池だったが、関東大震災ですっかり壊れてしまったので、只の水溜り程度のものになつてしまつていた。

先ず此の池の水を干して鯉を他に移した。中に流れ込んだ泥土の取除き作業が壇家の方々の勤勞奉仕に依つて、何日もかかつて行はれた。作業も終りに近づいた頃、一日、作業場へは滅多に見えなかつた。誠に奇跡とも云うべきである。

頃それを持って遊んで叱られた事、その目玉石は子供頃こうして持った位の大きさである事、弁天さんの御利益の事等々を話して帰られた。

此の話中も、勤勞奉仕の人々は、泥土を運び出して本堂の前西の方へ捨てて行つて。泥がたまると捨てにくいので、私が時々それをひきかいてならした。此の目玉石の話聞いて五分程して、その泥の捨て場へ行つた。直徑十cm程で、丁度昔の「おやき」と云つた平つたい大きなだんご程の石があつた。たつた今、弁天さんの目玉石の話聞いた許りなので「これだッ」と拾ひ上げた。私が此の話と聞いてなければ、又それより五分おそれれば泥沼の中にかくれてしまふ処だつた。危機一発と云う処だつた。こうして弁天さんの目玉石が発見された。誠に奇跡とも云うべきである。

「弁天さんの目玉石」にお参りする、眉目秀麗の彼氏彼女に廻り逢う事が出来、又、秀目美眼の子女に恵まれると云い伝へられる此の「弁天さんの目玉石」は庫裡等の建設の終る今秋（昭和五十二年）迄には、新しく整備中の池の中に作られる島に、元の様に祭ら

れる事になつてゐる。これから檀家の家々に生れる子供等がやがて成人になつた頃には、さぞ泣かせるのではないかと今から一苦勞である。（宗教法人瑞雲寺責任役員）

海歌

波荒き朝の浜辺に我が付つに
背を押すごとき強き松籟
海の子に生れしからにおのづから
波のリズムに身のしきしまる
引く波と寄せ来る波のうづ強き
鳴門の海の壯観ともいわん

広沢 秀貢

鉄 湯河原(1)

栢木 次郎

昭和五十一年十二月二十日会社と同輩の大塚久美さんの案内に依り湯河原鍛冶屋敷址を探つて來ました。当日は大塚さんは多忙のため案内が出来ず、大塚さん御母様大塚先生の案内に依り湯河原鍛冶屋敷址附近に五郎神社、金山社等



あり、又鍛冶屋附近からの出上品鉄滓に依るものである。さらに五十二年一月十五日ふたたび湯河原鍛冶屋探検に、同行されました方々は大塚さん、大塚先生、同町議長の高橋先生です。高橋先生の話に依るとやはり鍛冶に関する詳細文献がなく地名字名又出土物等によって知る程度であり、鍛冶の規模又は製品等は全く分からず今後の研究課題であり難題であります。

神奈川県では鎌倉が鉄としての名を上げています。御存知鎌倉は天下経営の地として発展した武家政治の地である、その鎌倉が刀鍛冶師岡崎五部正宗で有名であります。

そのことは樋口清之先生著のはだかの日本史の中に出て来る鎌倉は凝灰岩丘陵の上に築かれた町で、凝灰岩中には磁鉄鉱が大量に含まれている、それが風化作用によって凝灰岩の部分が流出すると鉄分のみが残りさらに一カ所に固まると砂鉄の層を形成する……以上それが層となり、今でも見られるのが七里が浜である。湯河原も高橋先生の話に依ると吉浜も砂鉄の層をなし波が立つにつれて海水が黒ずんだ色となっている、此の砂鉄が流出する源は不明ですが、おそらく新崎川

を経て吉浜につく、真砂礫の名がある所から確証の処である、さらに上流が鍛冶屋橋さらに五郎神社、さらに五郎神社を下った進行方向右手に金山社の祠がある五郎神社を上手に金山社を右手に鍛冶屋敷を左手に真砂を下手に結ぶ線がほぼ鍛冶屋敷の謎を推察する。はなからうかたと解察する。酒匂鍛冶分依り出土する羽口や鉄滓は未だ見つけて居ませんがおそらく発見された時点で一つの謎を解く鍵となることであろう。

湯河原に於ける鍛冶の歴史はおそらく不明である。現状に於ける湯河原の鍛冶を知る資料が不足致して居ますので当地の方々の見聞を知りたく協力を願うものであります。

鍛冶に必要な燃料炭、鉄原料、人足等の原料資源や作業に従事する人達の詳細が解らずである。従って今日の二回の調査で不明ながら知った点は以上であります。

- 一、鍛冶を指す唯一の点、鍛冶屋の地名？
 - 二、鉄の原料等を示す真砂(橋ノ新崎川)？
 - 三、鍛冶の業をなす処の祭神、金山社？
 - 四、刀鍛冶師を祭神とする五郎神社？
 - 五、鍛冶に必要とする鉄材
- 燃料炭、水資源等は近(おそらく鍛冶屋周辺から入手)くからの入手が最も有力である
- 又北条所領役帳には記載がなく後北条氏以後明治初頭迄の間ではなからうかと思いますが、どの時代にあてはまるかは知る資料もなし残念であると思えます。いづれにしても今後の継統研究に期するしかないからである。同時に三竹山中のたたら、山北の鍛冶屋敷等の研究調査し謎を解く鍵を見つけてはならないし又同時に研究されている方々の協力も必要となり広域範囲に及ぶ研究を願うて居ます。

- 一、山北鍛冶屋敷、三竹タタラ、酒匂鍛冶分、湯河原鍛冶屋その他の共通関連
- 二、鍛冶周辺の地名や字名の共通点とその意味
- 三、鍛冶を業とする鍛冶の規模と祭神や主神
- 四、鍛冶に必要な燃料炭、鉄材砂鉄(粒、粉鉄)、水資源(新崎川？粘土、羽口、かまど他)の入手先
- 五、鍛冶に依って生産される製品、生産力

酒匂鍛冶考

川瀬 春雄

六、その他鍛冶に関する調査項目

以上の点から鍛冶研究を遂行する。

鍛冶を一口に言っても広範囲に及ぶものでありますから共通点や類似、関連に依って文化史を知るものであります。吾々は郷土を愛し郷土の姿を此の目で此の耳で見えて聞いて郷土を知ろうではありませんか。それらに依って郷土の姿や歴史を代々に伝え記録に残さんことこそ郷土史研究である

鍛冶を研究遂行段階に於て新たに資料が入手すれば発表致したく思います。鍛冶は郷土に於ける手工業発達の歴史の一ページであると思われ、鍛冶研究を始めて発表し一年余になるが未解決の部分が多い点から今後の研究長期化を見せたい。然しながら鍛冶の研究は皆様の教示協力等によって形成されると思えます。(つづく)

も錯雑して一村の如し」と表現されている。新村鍛冶分は四域を彼村(酒匂村)に包囲された形になり家並も酒匂村のそれと連続していた為おそらく一見しただけでは村境が判然しなかった様である。当時として、この様な事例は余りなかったではなからうか、何故この様な事が行われたのか可成長い間考えさせられた。漸く思い当たったのは徳川時代初期に行われた商農分離の政策がここにもなされたのではないかと語り事であった。庶民の大部分である農民は自給自足の生活を強制され商工業に従事する人々は原則として農村から引離し居住区を指定し、更に職種によって一ヶ所に集められたと言う。城下町小田原に於ても今なお大町、鍋町、青物町などの町名が残されているのは周知である。小田原に於けるこれ等のものは徳川時代初期になされたであろうが、酒匂鍛冶分の場合は時代も大分降っての事であった為か強制移住と迄いかなかったが之に準じての便宜的措施ではなかったかと考えられる。行政上は村としての扱いはあったが、村の呼称を用いず鍛冶分と呼んだところから見て之は鍛冶業者の居住区としての性格を持った

もの様である。
永い年月ここに繁栄した
鍛冶業も次第に衰へ天保十
年頃には僅か七軒となり明
治新政府に変わった時期には
既に絶滅した事もあって呼

随筆 密造した酒の中に 蛇がいたという話

(巳年にちなんで)
額田喜代春

今からずっと大昔のこと
比叡山に一人の僧がいたが
山にいてもいっこのう、うだ
つがあがらなかつたので、う
山を降りて生まれ故郷の撰
津の国に帰り、妻をもらっ
てそこに住みついた。

そして外にも坊さんとい
なかつたので、この里で法
事を行なったり供養をし
たり、また時には里人は自然
とこの僧を呼んで講師にし
た。

かくべつ取り立てた才能
のある僧でもなかつたが、
それくらいのことでは心得
いたので大事な法会には、
きままって導師になつたの
である。

そこで法会の際にお供
えの餅をたくさん頂戴した
が、人にもやらず家にとつ
ておいたのが自然に沢山た
まってしまうた。

び慣わされてきた鍛冶村の
名も明治七年三月、百八十
何年目か再び元の酒匂村に
合併されて消え去つたので
ある。(つづく)

そこで僧の妻は、このた
くさんの餅を子供や従者な
どに無駄に食わせるよりは
少々かびが生えたるを細か
くきざんで、それで酒を造
ろうと思ひ、夫の僧に相談
してみたところ、「それは
いい考えだ」と言つたので
酒を密造することになつた
それからだ、いふ経つて、も
う酒になつただろうと思つ
て、妻がかねて酒を造るの
に用いた大きな甕の蓋をそ
つとあけてみると、どうも
甕の中で何やら動いている
様子、麥だと思つたが、暗
くてよく見えないので、火
を点して甕のなかに差し入
れてよく見ると、甕いっぽ
いに大小さまざまの蛇が鎌
首をもたげてよるによろ
していた。

「まあ怖いノどうしたと
いうんでしよう？」と言ひ

ざま、蓋もそこそこに逃げ
だしてしまつた。さつそく
夫に注進したから、夫も、
△そんなおかしなことがあ
るうか、もしや妻が見そこ
なつたかもしれない、自分
で行つて調べてみよう、自分
で火を点して恐る恐る
甕の中をのぞいてみると
まさに蛇がうようよしてい
る。そこで夫も驚いて逃げ
帰つた。
しかたがないので甕に蓋
をかぶせ、「このまま捨て
てこよう」と言つて、遠く
まで担いで行つたところ、
広い野原があつたので、そ
こにこっそり捨てて来た。
それから二、三日過ぎて
から、三人連れの男がその
野原を通つて、捨ててある
甕をみつけた。「あれはい
つた何だろ？」と言つて
一人の男が近づいてその蓋
をあけてのぞいてみたところ、
中からうまそうな酒の
においがぶんぶんにおつて
来た。びつくりして仲間を
呼んだから、あとの二人も
のぞいてみると、甕になみ
なみと酒がはいっている。
「どうしてこんなところに
酒があるんだらう？」と三
人で顔をつき合せている
と、中の一人が、「ひとつ
この酒を飲んでやろう」と
言ひ出した。あとの二人は
驚いて、「こんな野原のま
ん中に捨ててあるのが怪し

い。何ぞ曰くのあるもので
なければ、誰がただ捨てる
ものか？、あぶなくて飲め
たものじゃない」と
言つてとめたが、先に飲
むと言つた男は極めて上戸
だつたので、どこから手が
であるほどの気持ちになつ
て、「いいとも、それじゃお前
たちは飲まなきゃいいさ、
おれはたとえどんなに曰くが
あつて捨てたものでも、飲
まずにはおかないぞ。命を
取りたくも惜しくはない」と
言ひや、腰に下げた湯呑
みを取り出して、それ
ですくつて一杯飲んだ。ま
れが何んとも言えないうま
い酒だつたので、続けてぐ
びぐびと三杯も飲んだ。
あとの二人は固唾をのん
でそれを眺めていたが、も
ともどどつちも大の上戸な
ので、そろそろ咽喉がなり
出した。そこで、「今日は
こうして三人連れ立ってい
る。一人が死んだからとい
つて見捨てては行かれん、
たとえ殺される羽目になつ
ても、いっしょに死のうと
思つていくくらいだ。だか
らわれわれも付き合うこと
にしよう」と言つて、二人
とも飲み出した。これが一
口飲めば魂もとろけるほど
のうまい酒だつたので「ひ
とつゆつかり腰を落ちつて
飲もうじゃないか」と相
談し合つて、満々と酒のは

いつている大きな甕を、三
人で担いで家に持つて帰り
毎日大事に飲んだが、三人
とも別にどうという故障も
起こらなかつた。例の僧は
少しばかり知恵があつたば
かりに邪念が出て、仏の供
物を取り集めて人にもやら
ずに酒を造つたが、罪障が
深くて蛇になつてしまつた
のか、と思えばはずかしく
ならず、ひたすら後悔し
ていると、数日経つてから
人の噂に、「どこそこの男
どもが、三人連れ立つて野
原を通つたおりに、酒のは
いつた甕を見つて、家に持
つて帰つて飲んだそうなの
何とも言えずうまい酒だつ
たということだ」と言つて
いるのが自然に耳にはい
た。それでは蛇ではなかつ

たのか。罪障が深く、た
だ自分たちの目にだけ蛇と
見えただけ、と気がついて
いよいよ恥じて悲しかった
思えば、仏の供物を勝手
に私するのには、罪の重いに
である。しかしうつつに
蛇と見えてうごめいたとは
実に不可思議なこともある
ものだ。それゆゑ、こうゆ
う供物は、ひとりでもむさ
ぼらずに、人々にも与え、他
の坊さんにも食べさせるべ
きである。これは、酒を飲
んだ三人の男たちの話した
ことである。

であるから吾々後世の人
々もこの話を教訓にしてあ
まりに欲ばつてはならない
と大いに反省しようではあ
りませんか。(完)
小田原史談会理事

編集雑記

郷土の歴史を知ることには
郷土をよくすることにつな
がる。

最近、会員の中で物故さ
れる方が多い。東海俊美さ
んそれからよく原稿を寄せ
ていただきました神保栄さ
ん神田太郎吉さん等々。

△ウメといへば、梅干の
入ったニギリ飯、あるいは
日の丸弁当を自然に連想す
る。それはど「ウメ」は、
日本人の主食、米と兄弟で

あり、母娘の間柄になつて
いる。日本民族のシンボル
たる国旗と同じ「日の丸」
を象徴されている。
日本のウメの歴史一五〇
〇年をふりかえり、最近発
達した栄養生理学に照らし
てみると、先人の素晴らし
しい生活の知恵に対して、
今さらながら敬意をあらわ
すものである。

「ウメ」は、日本民族の
健康に大きく寄与しつづけ
てきたことを思いみるべき
であらう。梅の里より 穂坂